

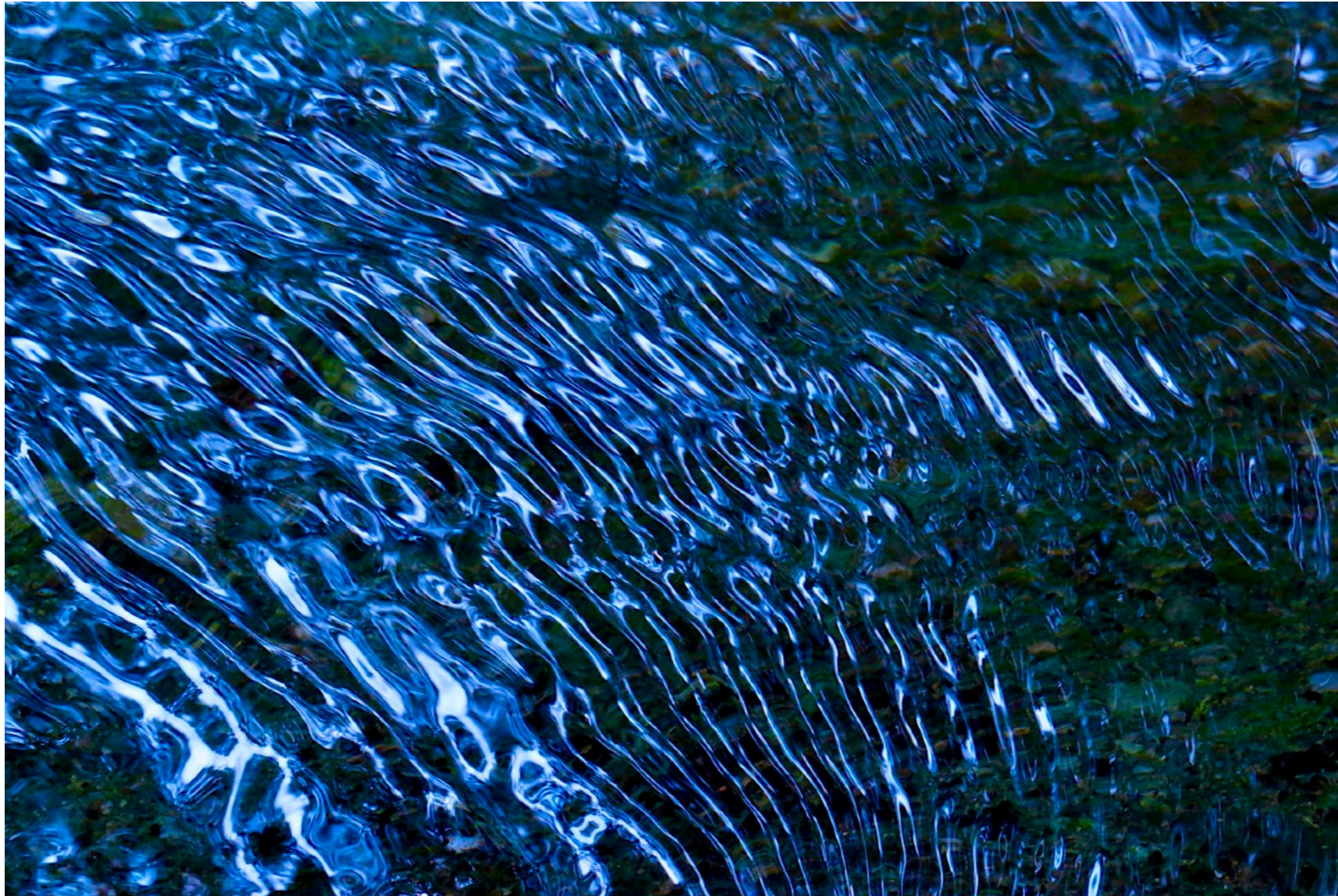
神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
101

【神秘学ポエジー～風遊戯 第202集】 photo ヴァージョン

photopos 2501-2525

《2021.7.13～2021.8.6》

神秘学遊戯団



闇を恐れるより  
偽物の光を恐れることだ

闇のなかで  
耳をすませ  
幻が過ぎ去るまで  
光の訪れを待てるように

悪を恐れるより  
偽物の善を恐れることだ

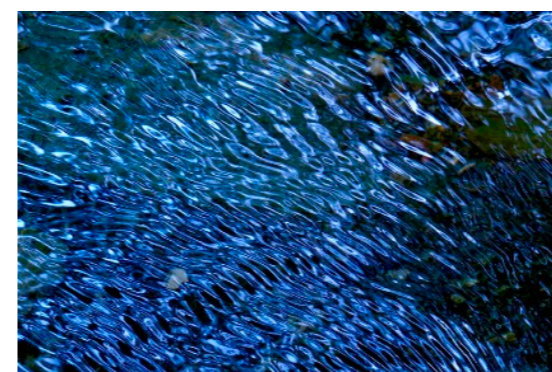
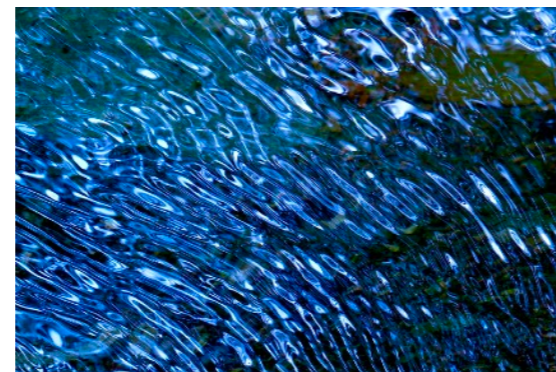
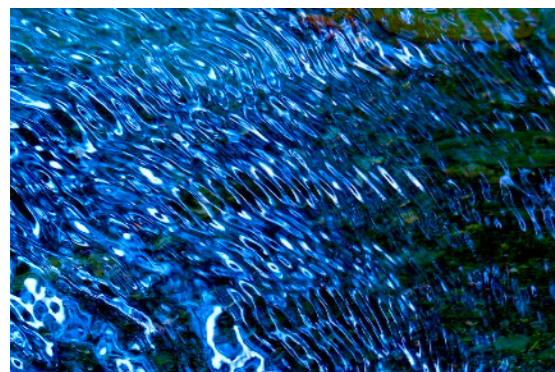
悪は時機外れの善  
みずからの場所を見定め  
時が来るまで  
善き知らせの訪れを待てるように

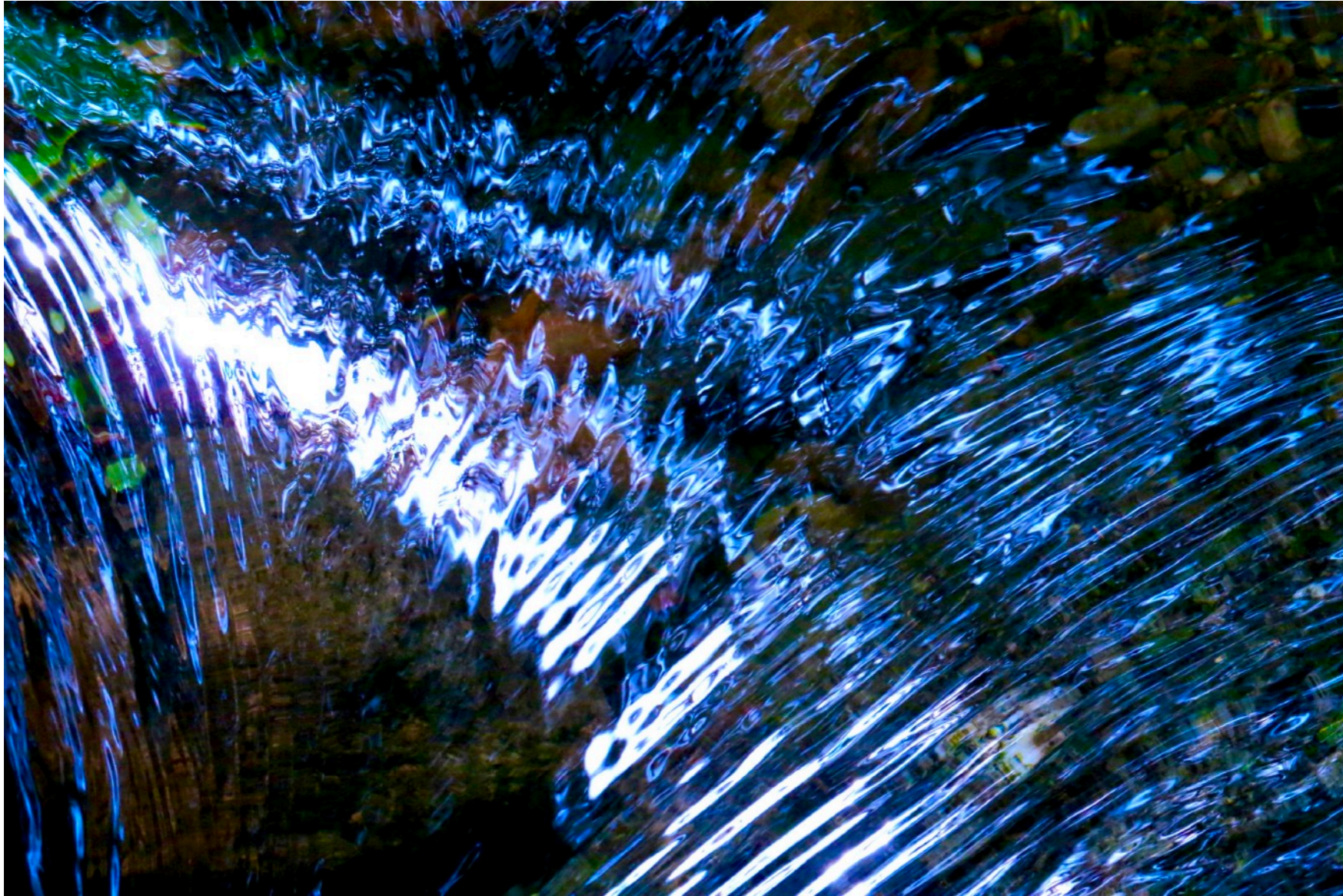
無知を恐れるより  
偽物の知を恐れることだ

無知を知ることこそ  
知ることのはじまりとなる  
知ることを超えられるまで  
知の開かれるのを待てるように

死を恐れるより  
偽物の生を恐れることだ

生の果てに死は訪れるが  
死はあらたなはじまりの種となる  
善く生きることこそ  
死を深めてゆけるように



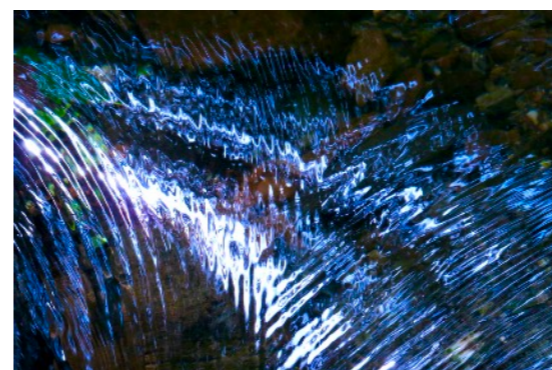
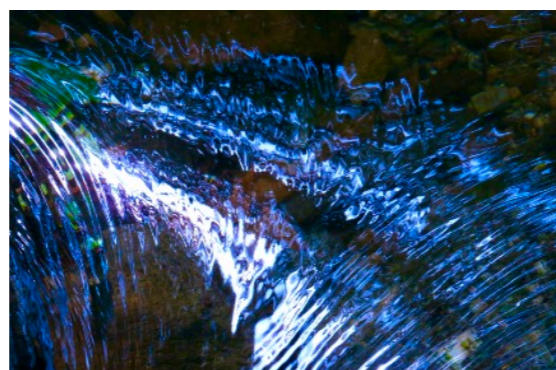
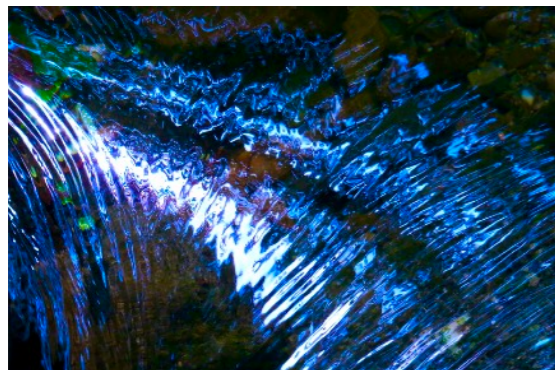


なんのために  
を  
外したとき  
生きることは  
ほんとうに  
生きることになる

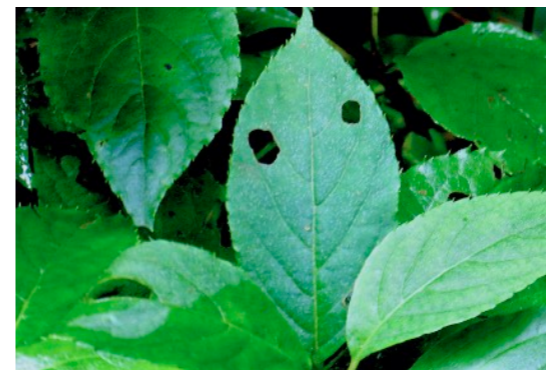
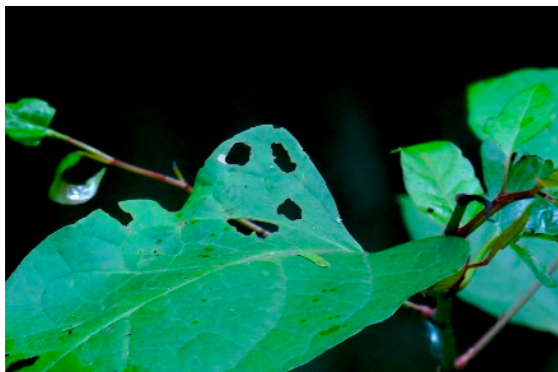
なんのために  
を  
外したとき  
歌うことは  
ほんとうに  
歌うことになる

なんのために  
を  
外したとき  
遊ぶことは  
ほんとうに  
遊ぶことになる

なんのために  
を  
外したとき  
愛することは  
ほんとうに  
愛することになる



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

花なきときは  
花なきように

光なきときは  
光なきように

こころのひみつを  
まもるために

語れぬときは  
語らぬがいい

歌えぬときは  
歌わぬがいい

こころのすがたを  
みせぬために

流れるときは  
流れるままに

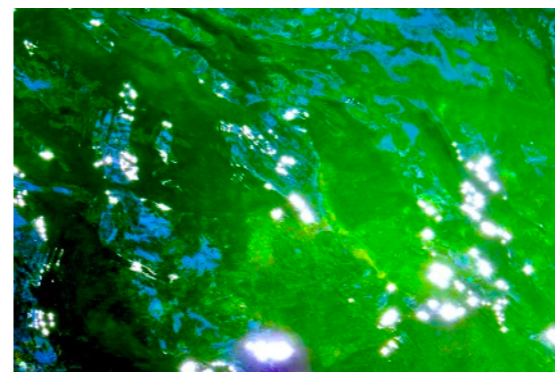
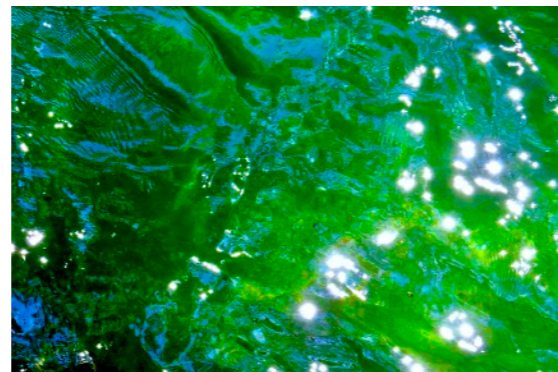
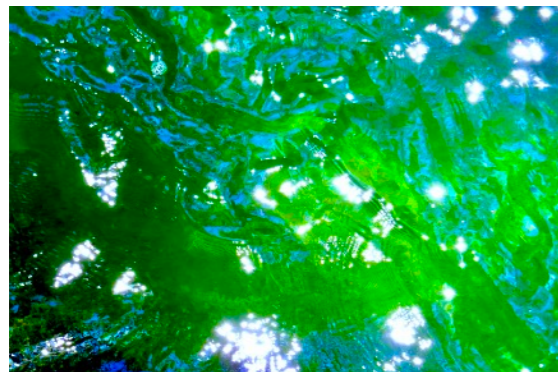
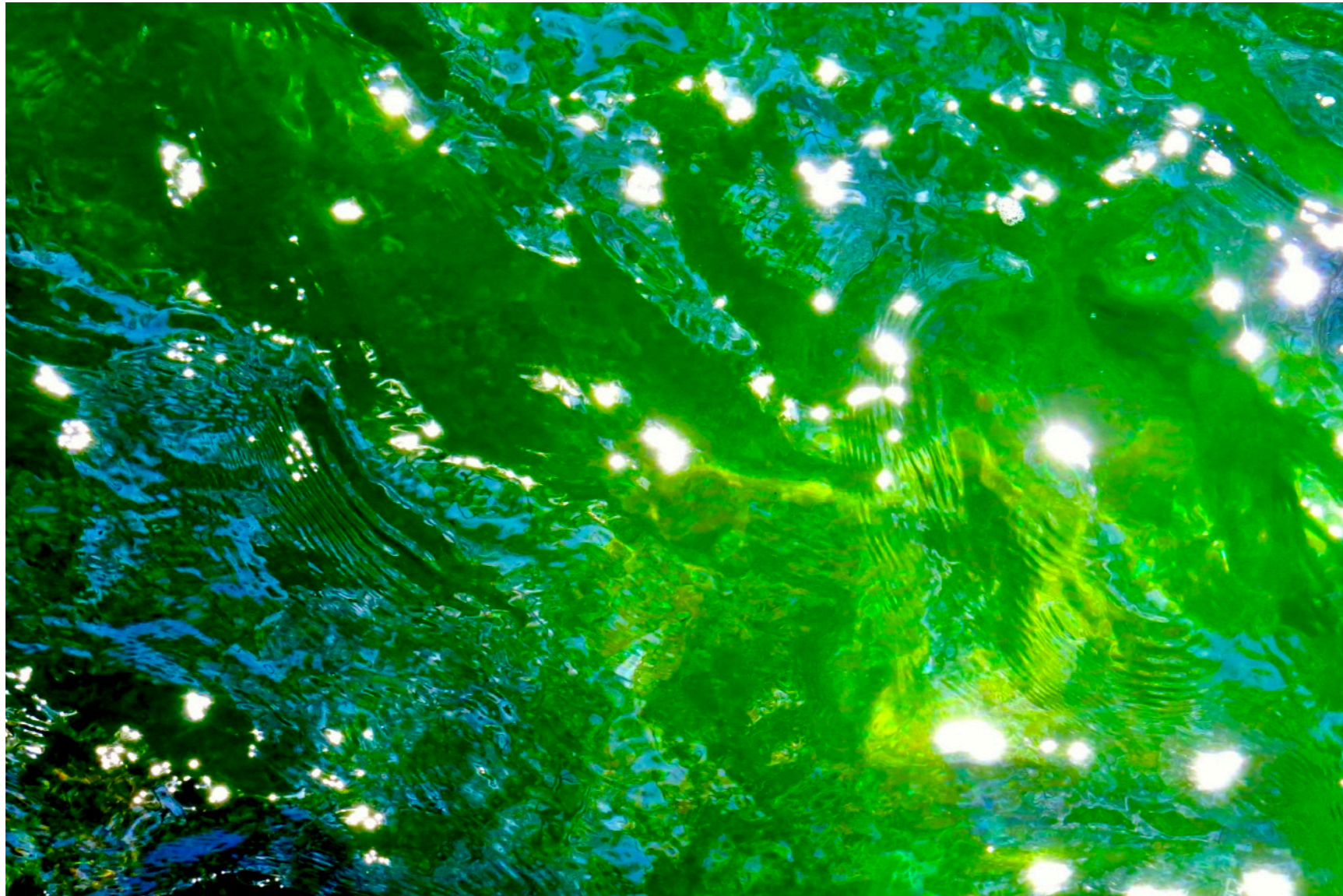
揺れるときは  
揺れるままに

こころのうごきを  
とどめぬために

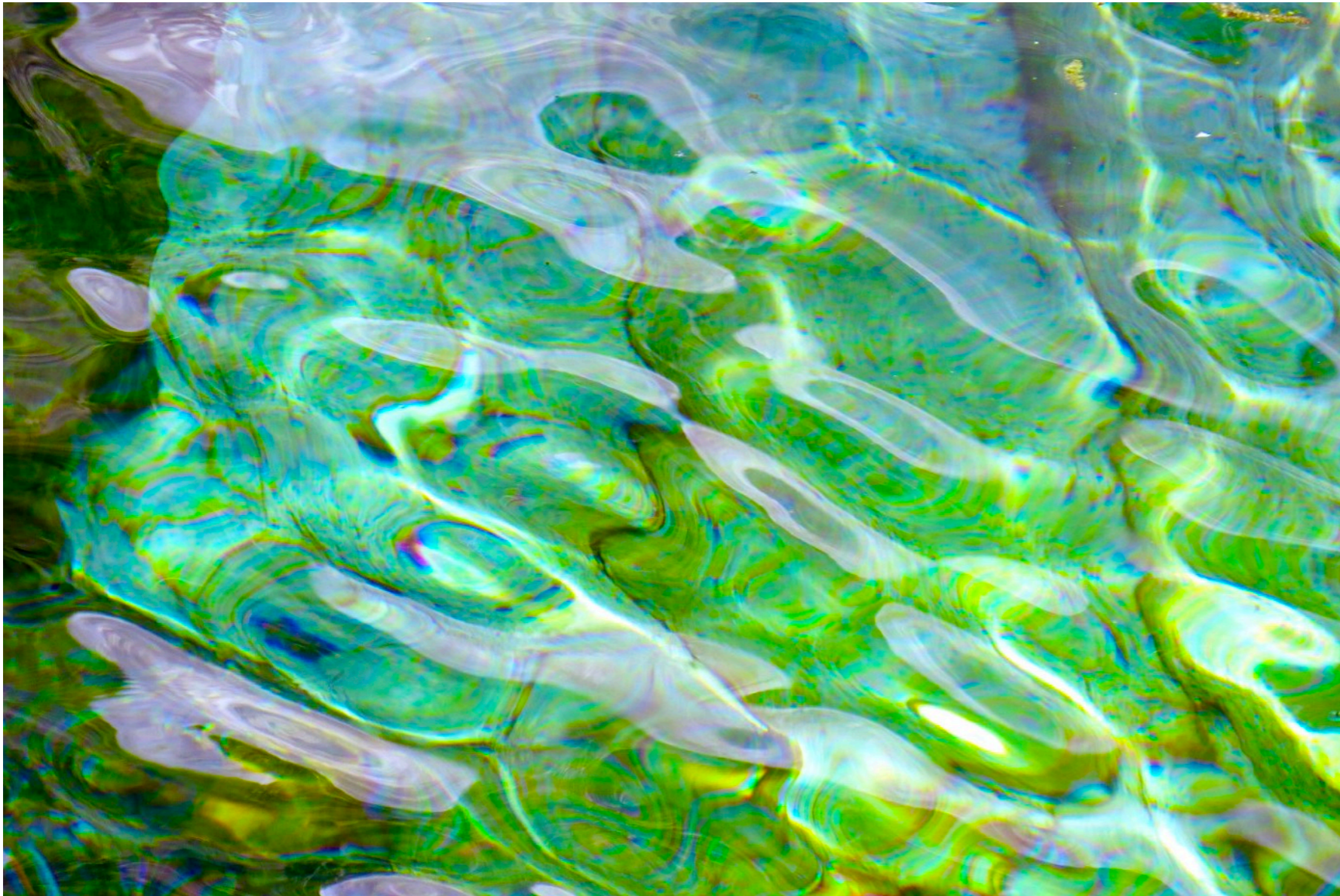
悲しきときは  
悲しむがいい

楽しきときは  
楽しむがいい

こころのちからを  
そだてるために



ことばに  
からだか  
なかったら  
ことばは  
うたに  
なれるだろうか  
からだに  
こころが  
なかったら  
からだは  
わたしの  
からだだろうか  
こころに  
いのちが  
なかったら  
こころは  
どこで  
いきるのだろうか  
いのちに  
あいが  
なかったら  
いのちは  
だれと  
いきられる  
あいに  
ことばは  
いらないけれど  
うたは  
あいを  
うたうだろう  
からだは  
あいを  
はこぶだろう  
こころは  
あいを  
まもるだろう  
いのちは  
あいを  
つたえるだろう



あそぶ  
ために  
生まれてきた

鬼さんこちら  
通りゃんせ  
後ろの正面だあれ

あそべぬ  
ならば  
なんとしよう

あそばずに  
帰る子は  
いねえかあ

怒りんぼも  
泣き虫も  
あそべやあそべ

いじめっ子も  
ぶりっ子も  
あそべやあそべ

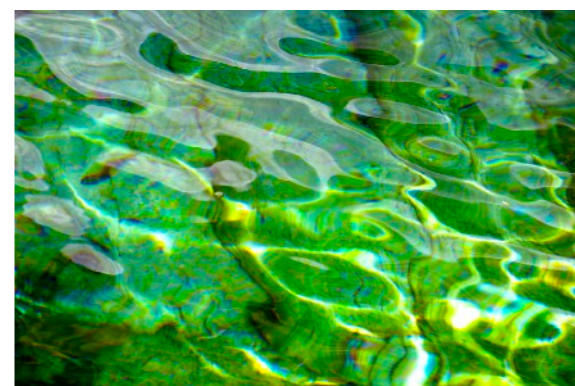
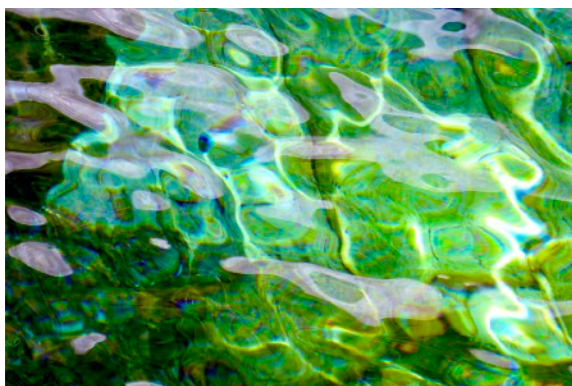
この世は  
ひろくて  
せまっこく

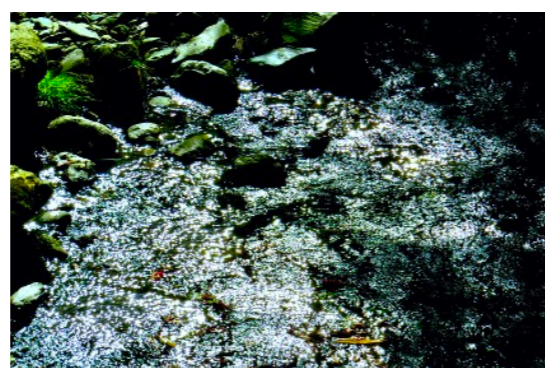
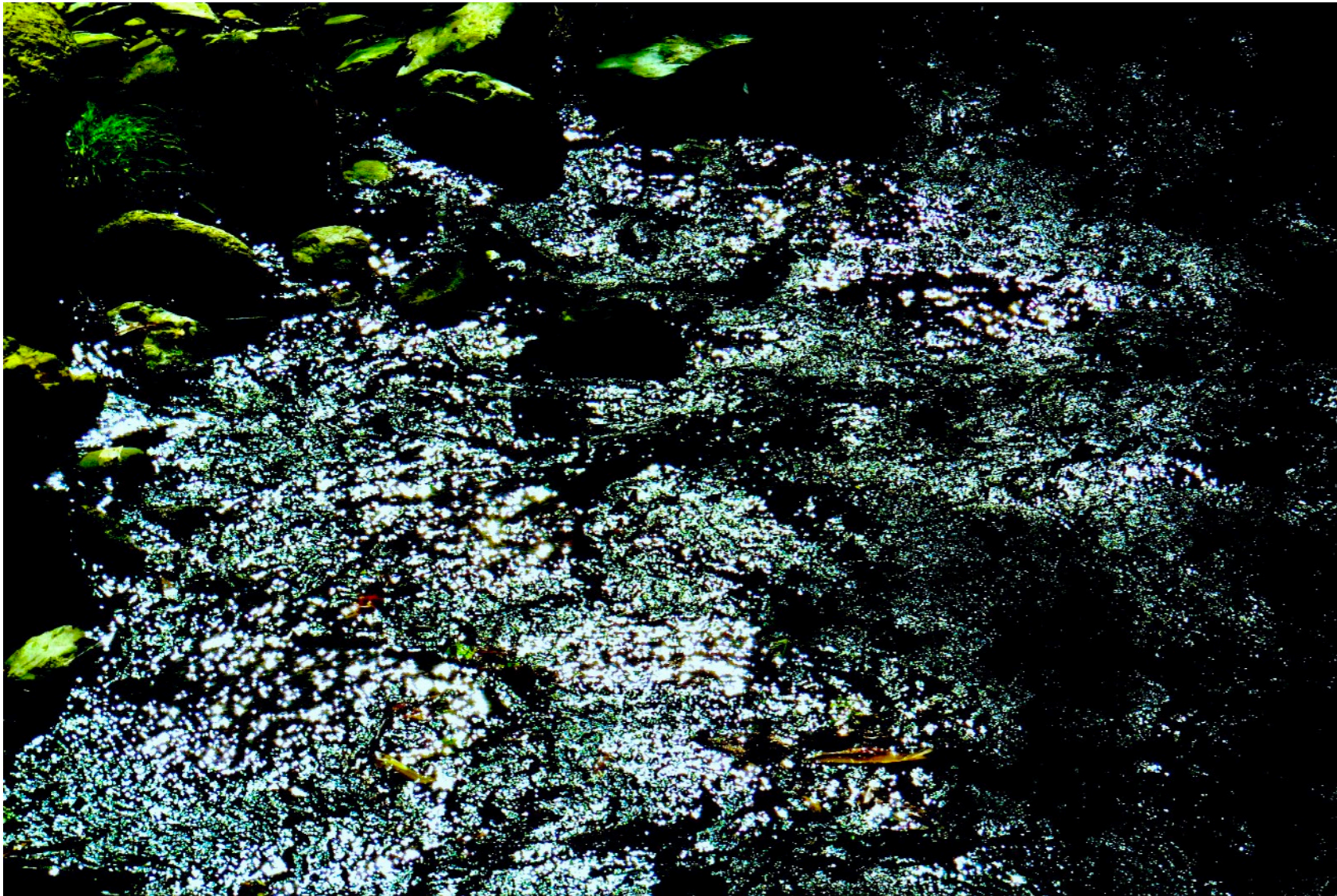
時は  
ながくて  
みじかくて

あそぶとき  
あそべば  
あそべ

あそぶ  
ために  
生きている

あそんだ  
あとは  
またあした





※愛媛県久万高原町・面河溪にて

思い出せそうで  
どうしても思い出せない  
記憶の深淵には  
秘密の川が  
流れているという

私はその水を飲んで  
すべてを忘れてしまったのか

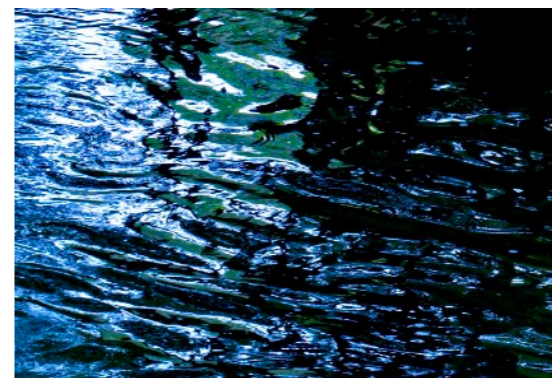
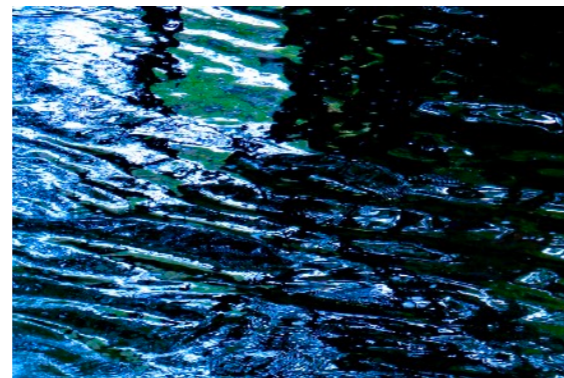
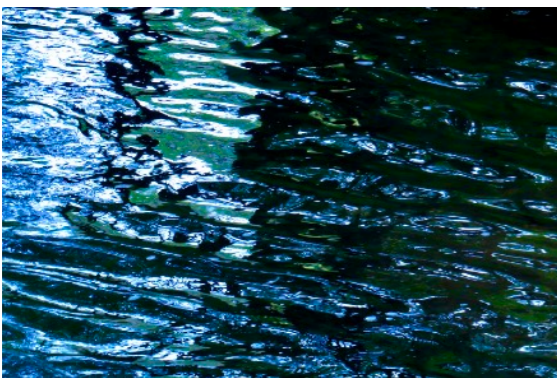
目を閉じなければ  
見えない光のように  
耳を閉じなければ  
聞こえない言葉のように

私はいったい何を  
知り得ていたというのか

魂の陰画から  
うつろいだす  
不思議の絵模様を  
懸命に解き明かそうとする  
私でない私よ

私はいったい何を  
求めているのか

秘密の川を溯り  
深淵を彷徨い  
私が私になるまえの記憶が  
時の円環を成している  
源へと向かいながら



※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

はじめに  
道はなかったから  
道はつくられた

はじめの道は  
異族の首を手に持ち  
その呪いの力で  
祓い浄めて進んでできた  
見えない霊の道だった

道は  
ひとつではないから  
じぶんで選んで歩まねばならない

だれでも歩める道  
見分けのつかない道  
けもの道  
道なき道

道は  
ひとの数だけあり  
ひとりのなかにも  
無数の道がある

だれでも歩める  
そんな道を選ぶならば  
むしろ注意深くゆくことだ

そこでは  
自由が見えなくなり  
見えなくなったところに  
知らず入り込んでくるものがあるから

道なき道を歩む  
そんな道を選ぶならば  
自由の歌を歌いながら  
心して進むことだ

そこにも  
見えないものは訪れるだろうが  
自由はそれらを浄める歌として  
あらたな道の標ともなってゆくのだから





あらゆるものの  
源には  
純粋な経験がある

ひとつの経験は  
もうひとつの経験と  
照らしあいむずびあい

その無限展開のなかで  
あらゆる経験は  
多層化し多重化し  
多次元宇宙となって現象する

経験されることは  
なにひとつ  
失われることはない

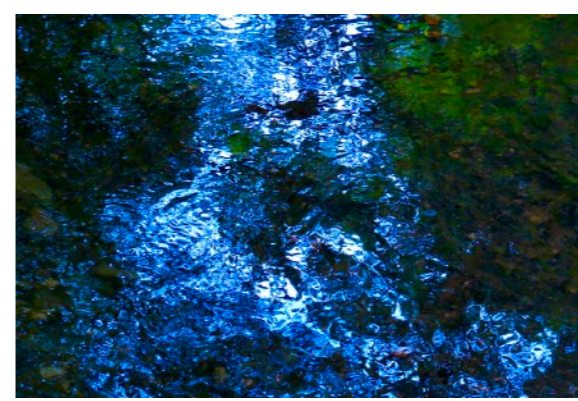
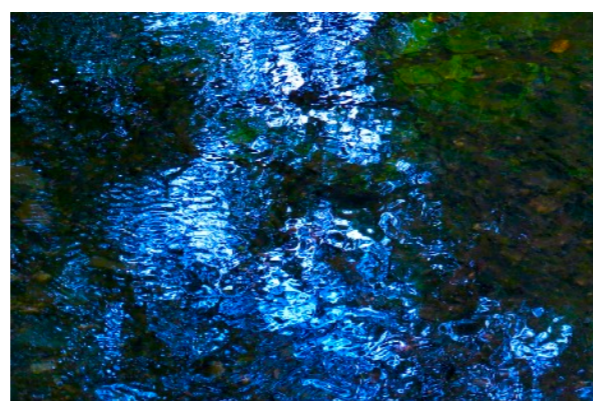
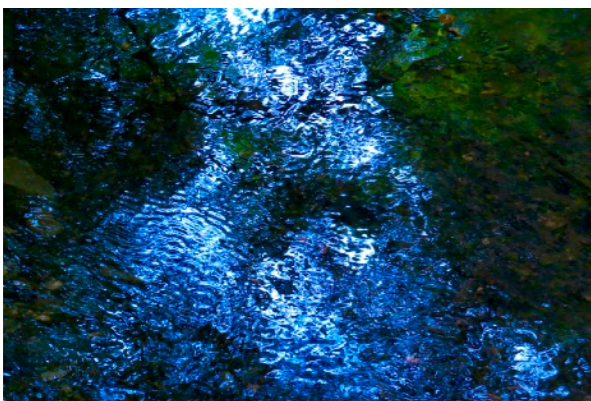
すべての経験は  
すべての宇宙で  
現象化しているのだが

わたしたちは  
あまりに忘れっぽいので  
わたしたちの経験が  
宇宙を現象させていることを  
知らぬまま生きている

そうしてときに  
じぶんを鏡にうつしながら  
わたしはいったい誰なのか  
無常を嘆きながら問うことになるのだ

あらゆるものは  
経験である  
そこからはじめたとき  
宇宙は経験そのものとなる

そのときはじめて  
みずからが多次元宇宙である  
そのことに気づくのだ



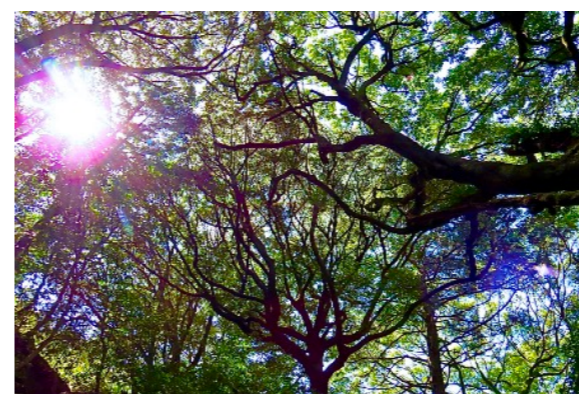
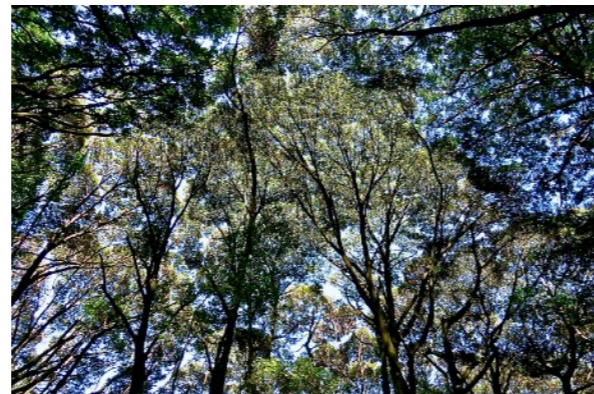


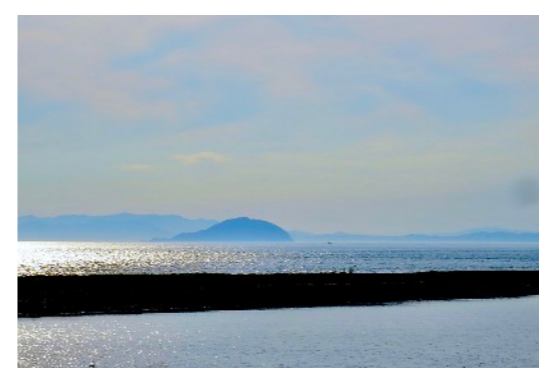
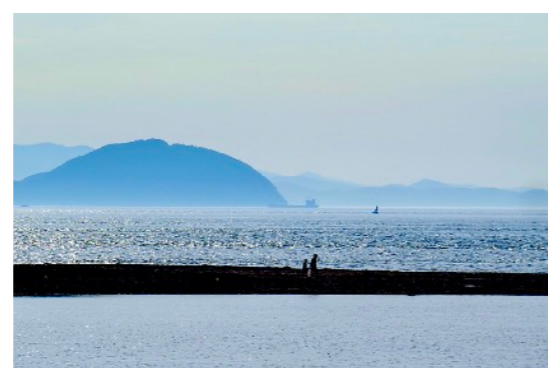
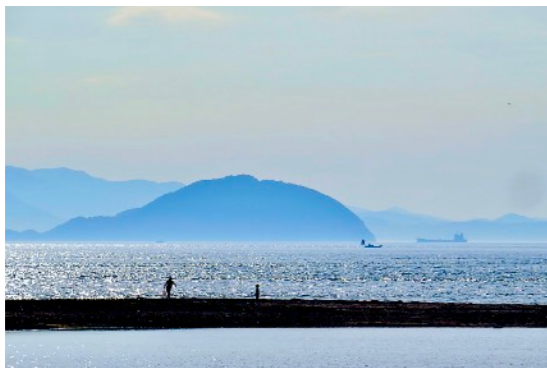
森の時間を  
生きるとき  
わたしは森になる

森は語る  
から  
わたしは  
森の言葉で  
語りはじめる

森は歌う  
から  
わたしは  
森の歌を  
歌いはじめる

森は踊る  
から  
わたしは  
森のからだとなって  
踊りはじめる





※愛媛県松山市・重信川河口にて

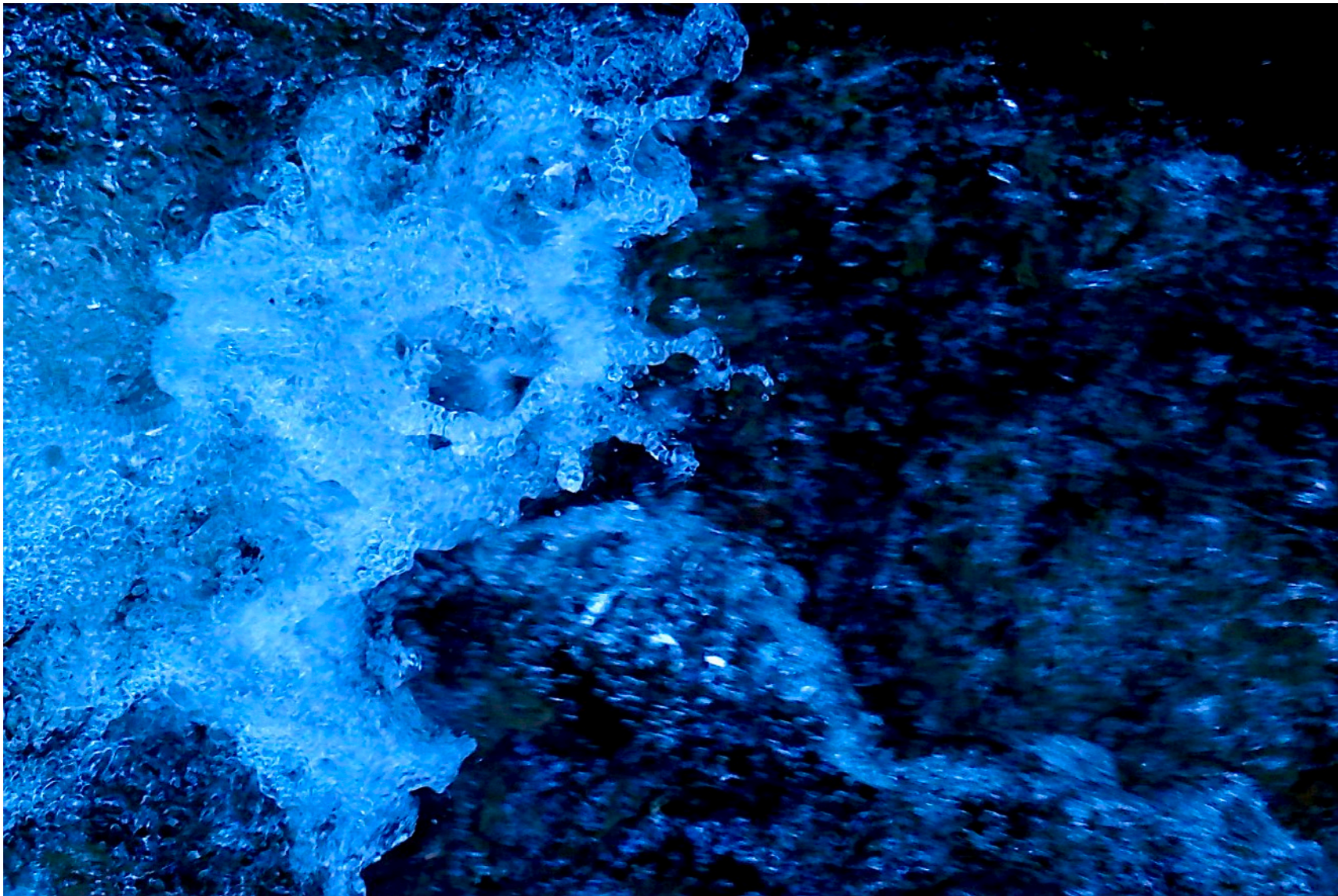
すべては  
ひとつから  
うまれ  
わかれゆき  
やがて  
むすばれる

そのとき  
ひとつはもう  
ただのひとつではない

むすばれたものは  
ひとつのままで  
たくさんのひとつ

わたしも  
あなたも  
ひとつから  
うまれ  
わたしと  
あなたになり  
やがて  
むすばれる

むすばれた  
わたしとあなたは  
ひとつのままで  
わたしとあなた



じぶんの顔が  
わからなくなる

どんな顔も  
仮面のように  
その奥にあるはずの顔が  
わからなくなるのだ

じぶんの心が  
わからなくなる

どんな心も  
装われた心のように  
そうでない裸の心が  
わからなくなるのだ

じぶんの体さえ  
わからなくなる

どんな体も  
にせものの体のように  
じぶんの体として  
感じられなくなるのだ

鏡よ鏡  
鏡さん  
わたしの  
ほんとうを  
映し出しておくれ

けれど  
鏡はただ  
わたしという現象を  
光の魔法に  
閉じ込めるばかりだから

わたしは  
わからないじぶんから  
はじめることにする





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ひとつに決めると  
ひとつに縛られる

ひとつからの自由へ

名づけると  
名に縛られる

名からの自由へ

だれかであろうとすると  
だれかであることに縛られる

だれでもない自由へ

専門にすると  
専門に縛られる

何にでも開かれた自由へ

役に立つと  
役に縛られる

役の外にいる自由へ

評価を求めると  
評価に縛られる

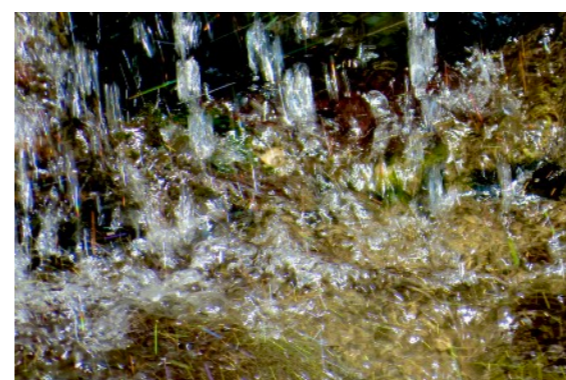
失敗する自由へ

行く先を決めると  
行き先に縛られる

目的にとらわれない自由へ

期限をつくると  
時間に縛られる

永遠とともにある自由へ



※愛媛県松山市・高縄山にて

少年の無心が  
有心に変わるとき  
好きはただ好きではいられなくなる

イノセンスの好きに  
いろんな理由が忍び込むとき  
少年はもう少年ではいられなくなるのだ

少年であることを忘れ去ったとき  
ひとは世間を生きるようになる

そこでは言葉はもう  
心のままではいられなくなり  
言葉にすればするほど  
心はそこから離れてゆく

言葉が心から離れたとき  
考えることは  
役に立つことばかりを求めるようになり

役に立つことを求めるようになると  
役に立たないことは  
世界から追放されることになるのだ

そして考えることは  
機械に置き換えられるようになり  
計算できないものは存在を許されなくなる

けれどふと  
少年の無心がよみがえることがある

好きがただ好きでいられるように  
言葉に心が寄りそえるように

永遠の少年は  
いつもそこにおいて  
無心に微笑んでいる



時を超えて  
生きるとはできるだろうか

この変わりつづける世界のなかで  
変わらないものはあるだろうか  
変わらないのは  
変わることだけではないか

生まれることは死にゆくことだ  
その生と死のあいだをわたしは生きているが  
恐れるのは死ではなく  
生をこそなのだろう

日々変わりつづける時を  
纏わなければならない  
この生という不可解  
そして矛盾  
矛盾を生きるそのなかに  
永遠は見つかるだろうか

「見つかったぞ！  
何が？ 永遠が」  
といったあとで  
ランボーは詩を捨てたが

詩は永遠とともに  
生きられねばならないだろう  
すべての矛盾とともに  
むしろ時を生きることのなかにこそ  
永遠を見つけるために



夢なのか  
現なのか

じぶんが  
どこにいるのか  
わからないときも

いまが  
いつなのか  
わからないときも

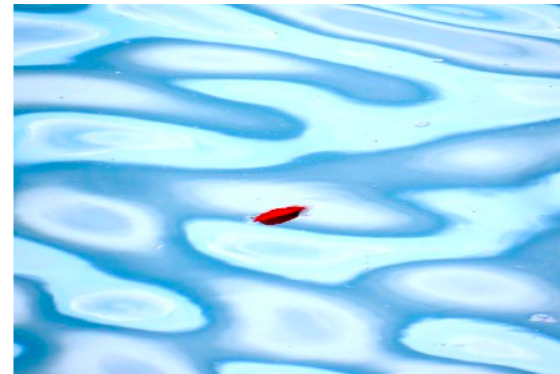
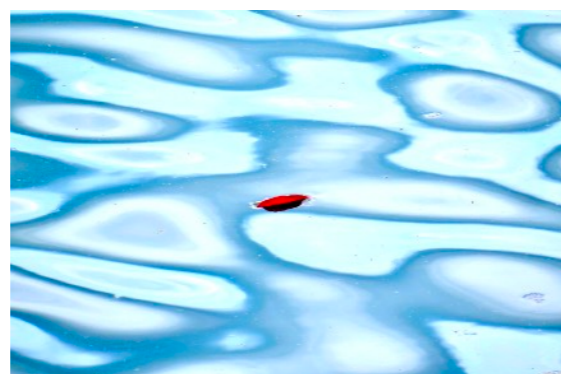
じぶんが  
じぶんであることが  
わからなくなってしまうときにさえ

魂は  
どんなところにも  
どんなときでも  
そばにいて

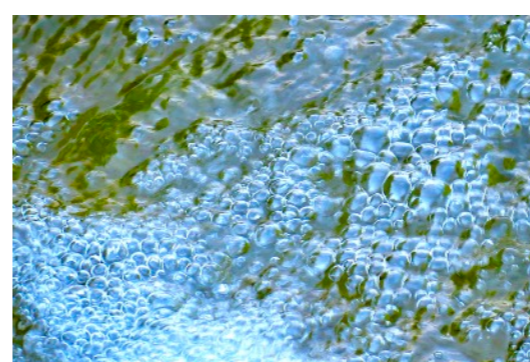
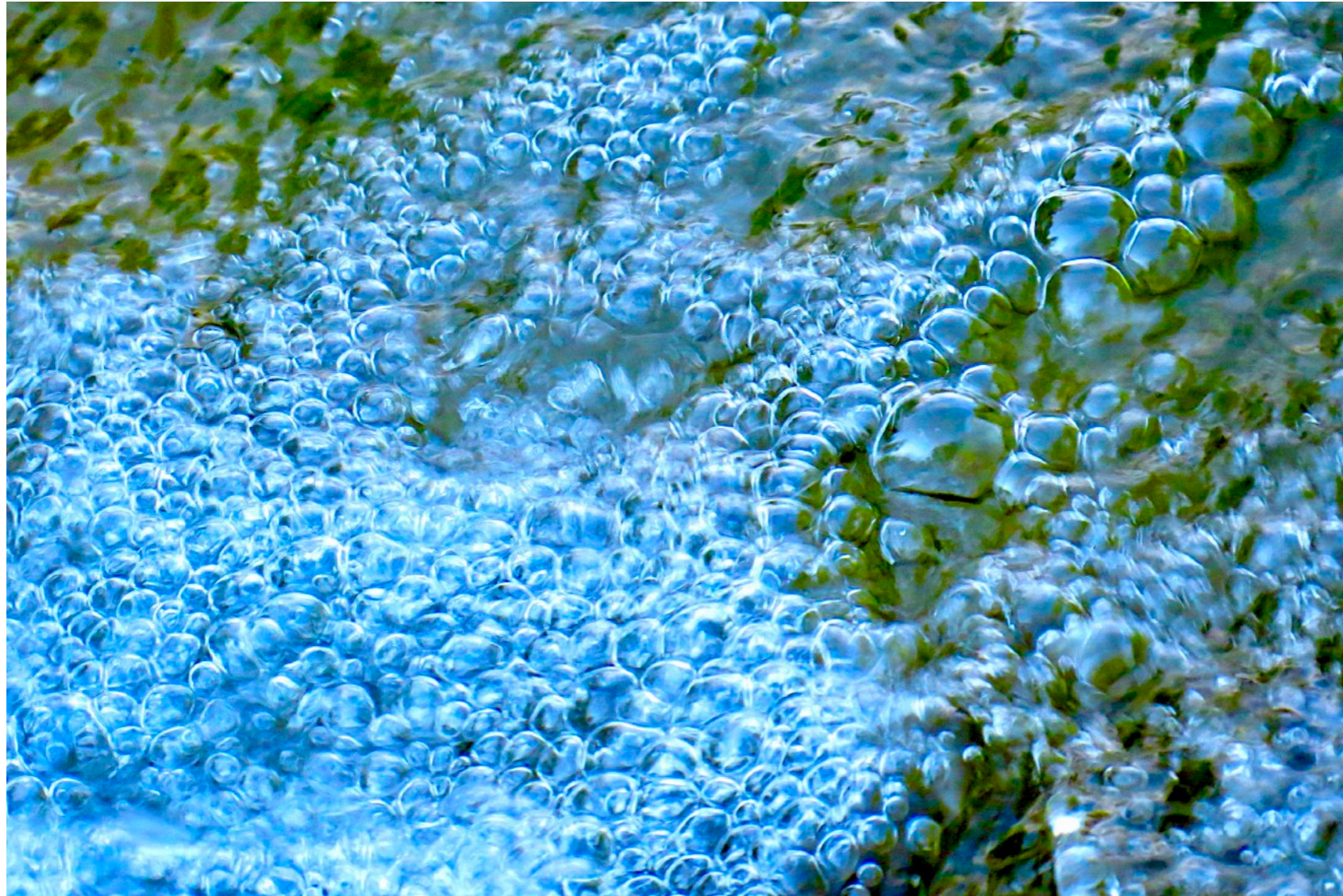
モナドのように  
世界を映しながら  
わたしに  
歌っている

だから  
じっと  
耳をすますのだ  
魂の歌に

わたしが  
わたしであることを  
思い出すために







※愛媛県松山市・高縄山にて

わたし  
という魂は  
うたかたの旅人

いつのまにか  
あらわれ

つかのまの  
からだを  
激しく燃やしながら

つかのまの  
ところで  
せわしなく歌い

つかのまの  
いまを  
永遠のごとく生き

やがて  
どこかへと  
去ってゆく

わたし  
という魂は  
わたしを忘れ

忘れたあとに  
またわたしになる  
うたかたの旅人なのか



沈黙と  
ともにあるとき  
世界は  
分けられていない

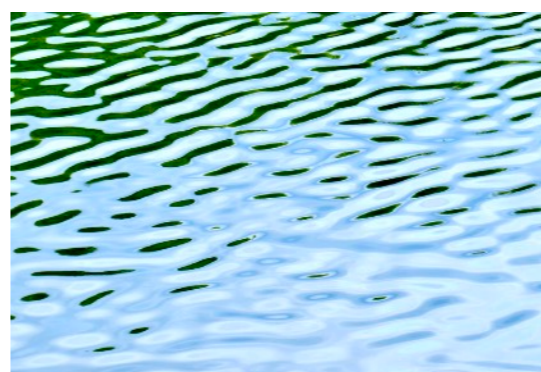
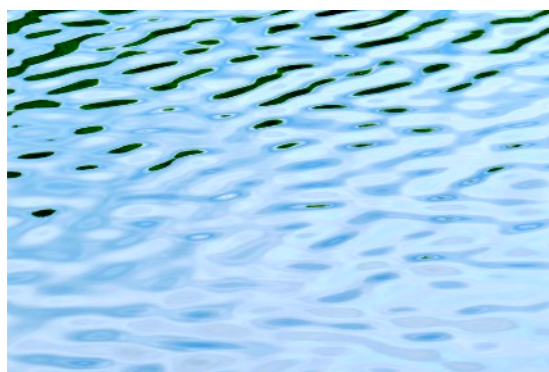
言葉とともに  
世界は  
分けられてしまう

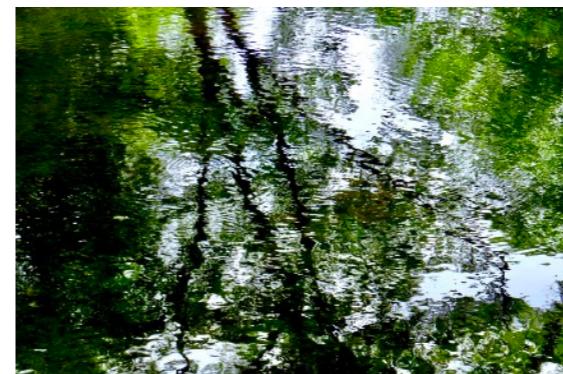
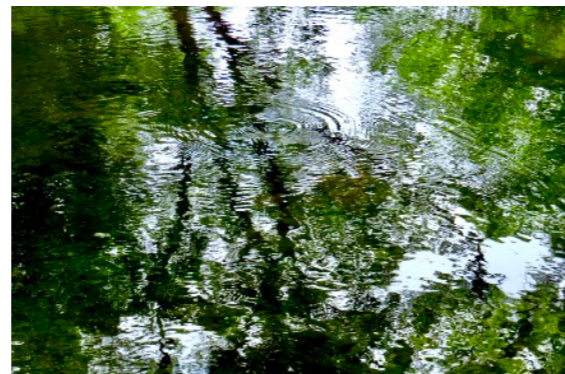
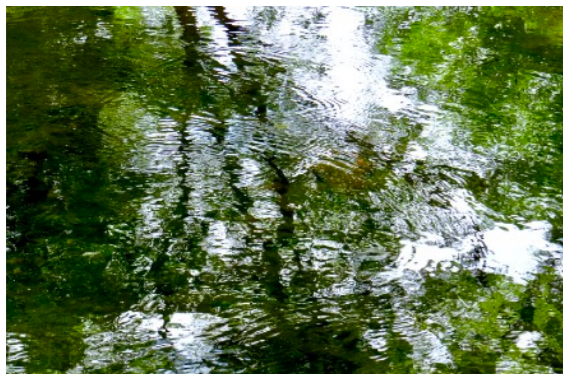
語り得ないことは  
沈黙しなければならないのに  
語らせられてしまうとき

分けられないものを  
分けてしまう言葉は  
すでに野蛮である

人間は  
言葉という  
野蛮を生きている

そのことに気づいたとき  
沈黙のとなりで  
詩は生まれる





※愛媛県久万高原町・古岩屋にて

始めを  
問うことは  
終わりを  
問うことだ

そして  
終わりは  
また  
始めへの問いになる

始めに  
蒔かれた種  
閃いた光が

次々と連鎖し  
絡みあい  
照らし合い

やがて  
また  
滅してゆき

それが  
新たな種を  
光を生む

それを  
問うことは  
やさしいが

それを  
たしかに生きることは  
いつもむずかしい

世界は始まり  
世界は終わり  
また始まってゆく

私は始まり  
私は終わり  
また始まってゆく

すべての時間を結ぶ  
メビウスの環が  
めぐり続けるように



時間は  
時計ではないのに  
時計になってしまったとき

時間は  
計測されるようになった

(いったいなにを)  
(測ろうというのか)

言葉は  
記号ではないのに  
記号になってしまったとき

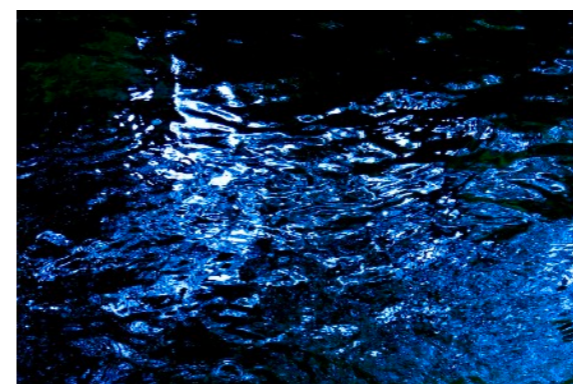
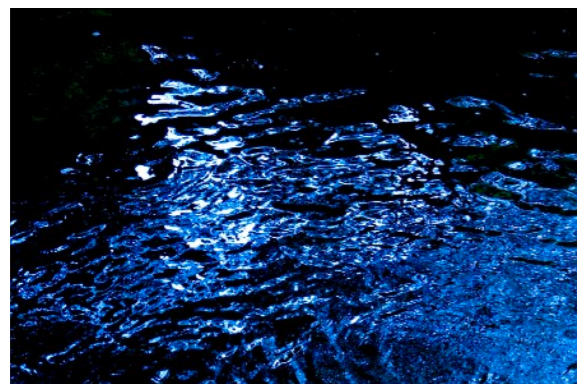
言葉から  
うたが失われた

(あのうたは  
(どこへ消えたのか)

身体は  
機械ではないのに  
機械になってしまったとき

身体に  
魂が姿を見せなくなった

(やがて心さえ)  
(なくなってしまうのか)





きれいな嘘を  
つきましよう

嘘のための  
嘘じゃなく

嘘の言葉でしか  
癒やせない心なら

きれいな嘘で  
癒やましよう

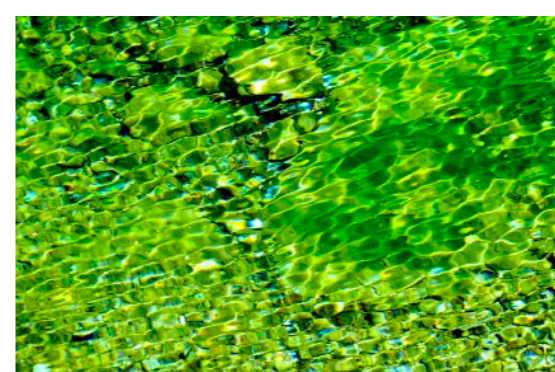
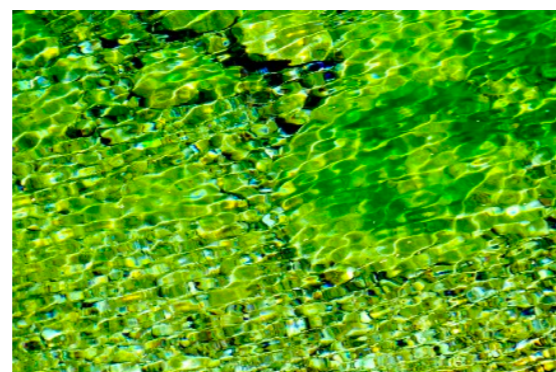
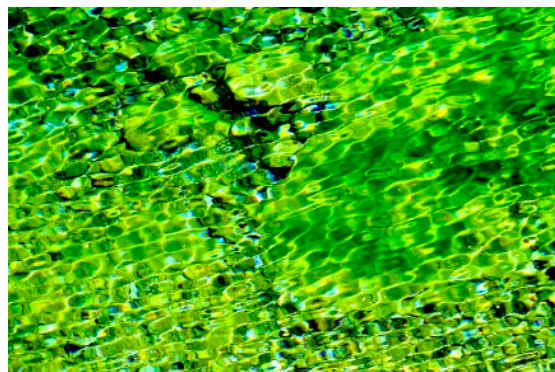
嘘のための嘘を  
見る目をもちましよう

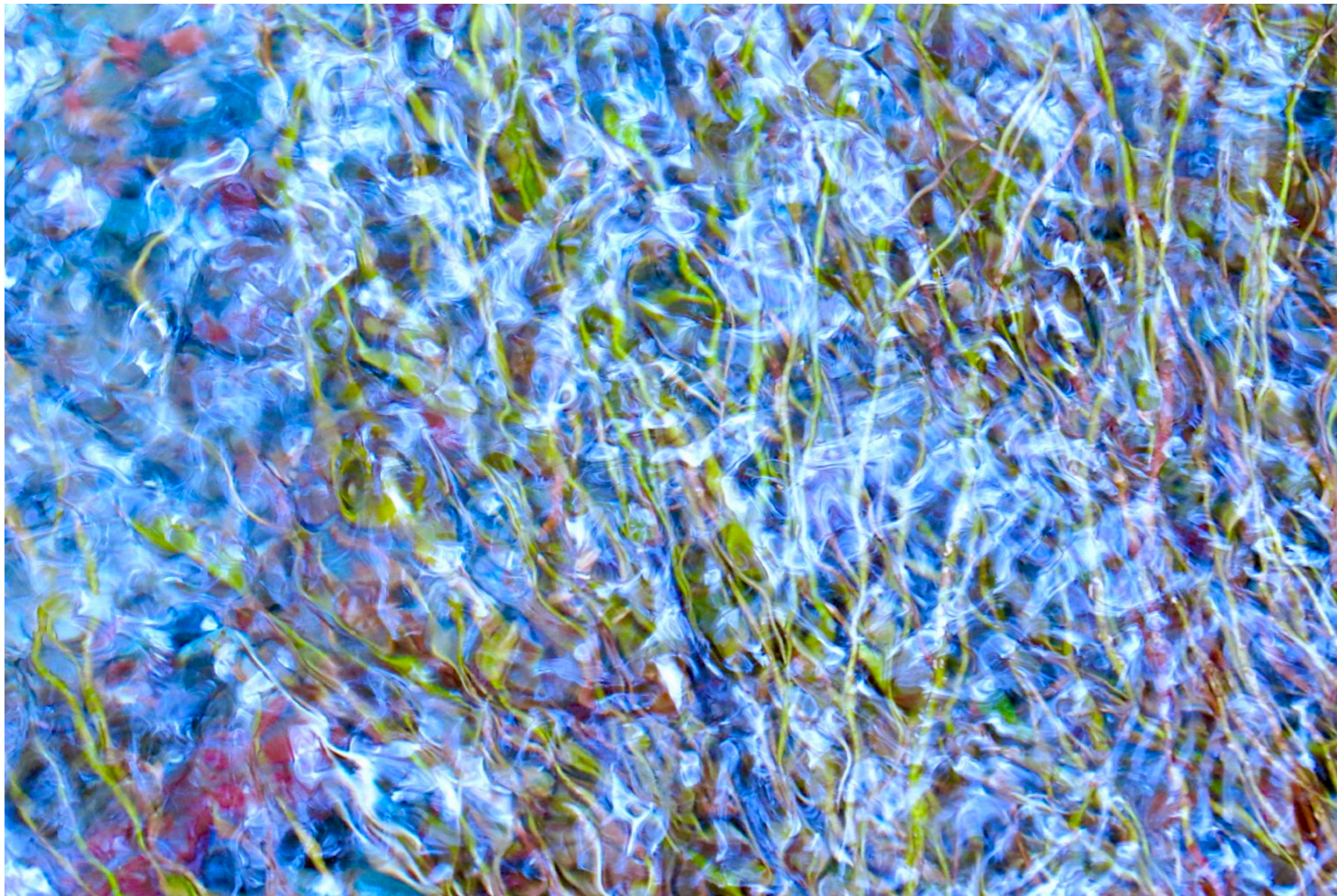
きれいに見える  
言葉の裏には  
見えない心が見隠れ

きれいは汚い  
汚ないはきれい

言葉の顔は  
ひとつじゃない

見えない言葉を  
聞きましよう





こころは  
ひとつ  
じゃない

見えない深みで  
無数のところが  
絡みあい  
つながりあい  
顕れている

からだは  
ひとつ  
じゃない

見えない深みで  
無数のからだ  
絡みあい  
つながりあい  
顕れている

時間は  
ひとつ  
じゃない

見えない深みで  
無数の時間が

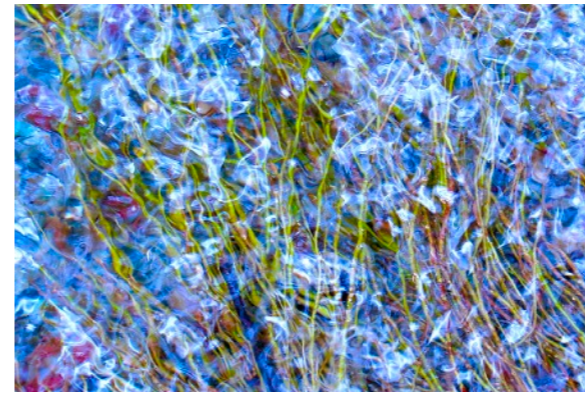
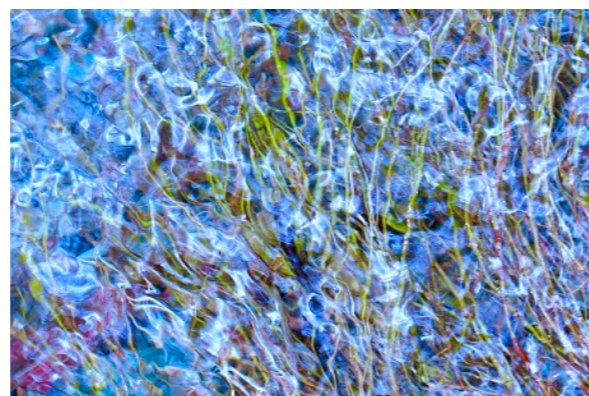
絡みあい  
つながりあい  
顕れている

だから

わたしは  
ひとり  
じゃない

見えない深みで  
無数のわたしが  
絡みあい  
つながりあい  
顕れている

秘密の言葉が  
絶えず開示され続けている  
そんな曼荼羅のように



\*愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



歌は  
夢から  
こぼれた  
言の葉だから

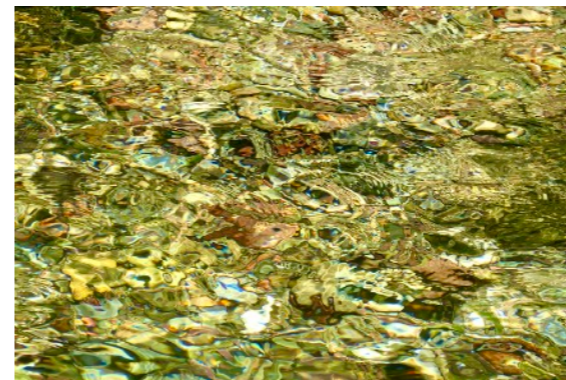
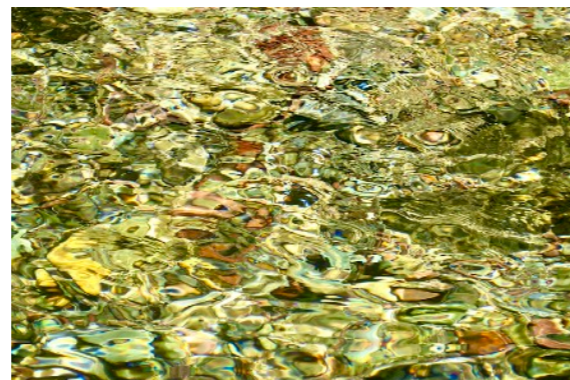
思い出そうとしても  
思い出せない  
そんな歌は  
夢の河原で  
いちばんはじめの言の葉を  
探さなければなりません

あなたは  
夢から  
生まれた  
魂だから

思い出そうとしても  
じぶんを思い出せない  
そんな魂は  
夢の河原で  
いちばんはじめのじぶんを  
探さなければなりません

世界は  
夢から  
紡がれた  
織物だから

思い出そうとしても  
思い出せない  
そんな織物は  
夢の河原で  
いちばんはじめの模様を  
探さなければなりません





ひみつの文字を  
解きあかすために  
世界の彼方まで  
旅する必要はないだろう

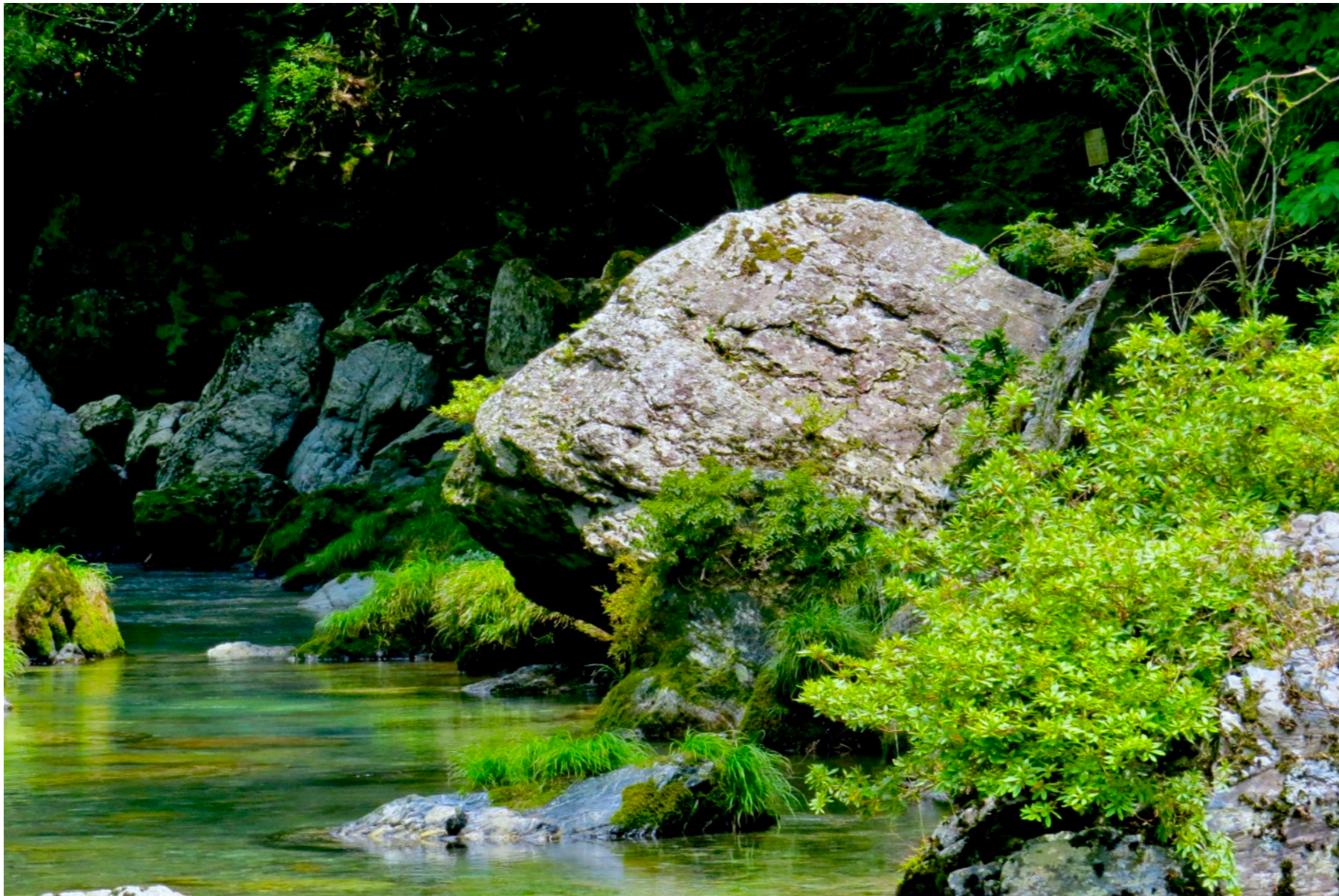
ひみつの文字は  
風のなか  
水のなか  
そして  
わたしのなか  
あなたのなかで  
息づき流れている  
それに気づくだけでいい

けれどそれを  
分けてはいけない  
それは分けられないものだから  
閉じ込めてはいけない  
それは自由の霊だから  
変わらないものにしてはいけない  
それは図式や論理ではないから

ひみつの文字は  
いまここに生きていて  
ともに呼吸しているのだ  
ほんとうの時間のなかで







どこから  
きたの

(はるかなむかし)  
(このほしに)

どうして  
きたの

(ふらりと)  
(あそびに)

だれと  
きたの

(ひとりだけど)  
(みんなもいっしょ)

なにをして  
いたの

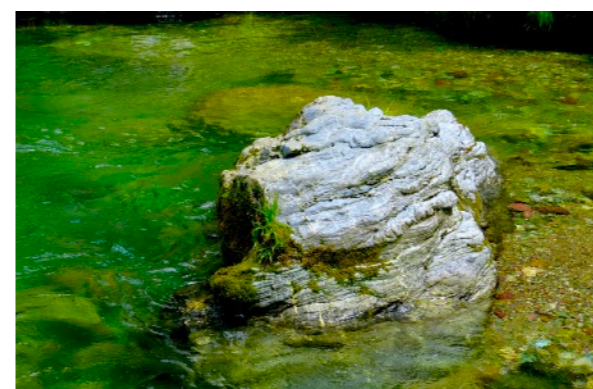
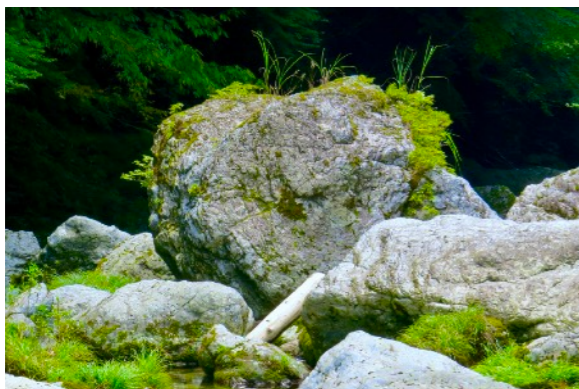
(もりのこえに)  
(みみをすませて)

これから  
どこへ

(ふらりと)  
(もといたところへ)

また  
あえる？

(あいたくなったら)  
(きっといつか)



※愛媛県内子町・小田深山溪谷にて



謎が  
迷宮から  
でてくると

詩人が  
それを  
言葉にする

詩人の言葉は  
迷宮の問いだ

答えのある問いは  
詩人にはいない

謎は謎を  
生むためにあるから

ときに謎と謎は  
つながりあいながら

錬金術的に変容し  
謎の曼荼羅になる

詩人は  
沈黙の深みで  
曼荼羅を生き

そして  
みずからが迷宮となり  
謎を生きはじめるのだ